

人権と女性

ハリマ・E・ワルザジ

国連人権小委員会奴隷制作業部会・委員長

財団法人 女性のためのアジア平和国民基金

無断転載を禁じます。

(財)女性のためのアジア平和国民基金

1998年8月発行

この講演は、国際女性の地位協会、日本 BPW 連合会、財団法人波多野ファミリースクール、アジア女性基金による共催で、1998年4月6日に行われた講演会のスピーチの要約です。

はじめに

国際社会における一つの優先事項である「人権と女性」問題を考える際、世界の女性の進歩を評価するためには歴史を振り返る必要があります。

何千年も前には、男性は家族構成の内外で権力を体現していました。エジプトの社会学者ナワル・エルサダーウィによると、農作業における貢献により母性社会において女性は家族の中で優位を保ち、男性と同等であったといえます。当時の階級の社会的概念は、階級、主人と奴隷など誰が奴隷であるかというような秩序は無かったわけです。

ところが、土地の私有制が始まり、私有財産制が始まり、そしてそれが親から子へと相続されるようになりますと状況が変わってきました。そういう中で母系社会から父系社会、父親、男性系列の社会へと人類は変化してきたといえると思います。

宗教の役割

このような状況の中で、女性が社会や家庭で力を得ているという状況は全く逆転してしまいました。女性は単なる支配する男性の対象物・目的物という位置づけになってしまいました。そして、男・父親・家族というものが中心の社会ができました。そして、本来人間を平等に扱べき宗教の世界においてもその変化がおこりました。中世のヨーロッパの神学者たちは、この男性社会へと移っていく過程で一つの役割を果たしました。つまり、女性の地位の悪化に手を貸したということです。例えば、中世の神学者たちはキリスト教の原罪、人間が犯した original sin、というものの源が女性にあったというような説明の仕方をして、女性に対して蔑視観を植え付ける上で、役割を果たしたということになるわけです。同様に他の地域においても、同じような位置づけが宗教家によってなされました。例えば、インドのマヌ法典では、子どもや女性は父親や夫に従わなければいけない、女性は決して独立してはならない、というようなことを言っています。それから、中国の宗教家、哲学者である孔子もやはり、女性は男性に従う、このことのためだけに存在するということを言っています。そして仏様（ほとけさま）、つまり仏教のブッダもまた、女性は悪がこの世に姿を現したものであるというような表現の仕方をしています。さらに、イスラム社会でも、イスラム教が紹介される前の時代、女の子が生まれるということは呪いだというふうと考えられ、時には生まれてすぐの女の赤ちゃんをそのまま、生きたまま地に埋めるというようなひどいことも行われ、そしてそのようなことを行う人がしばしばその女の子の父親であるということがありました。そんな中でイスラム教が、この生まれた女の子をすぐに生き埋め

にして殺してしまう、というような古くて悪い習慣を廃止しようという動きを始めました。そして、コーラン、これはイスラム教の神聖な教えを記してある文書ですが、このコーランにおいて例えば次のように教えています。

つまり、貧しくて自分の子どもを十分に育てることができないから、女の子には死んでもらう、殺す、このような貧しいが故に女の子を殺すということは絶対にしてはならない。もし、女の子を食べさせることができないのならば、私が、つまりイスラム教の予言者であるマホメットがその人たちを支え食事を与えるから、あなたたちが手をくだして殺しては絶対にならない、それは殺人であって犯してはならない犯罪である、このようにコーランは教えているわけです。そのイスラムの教えによって、アラビア半島地域のイスラム教を信じている地域によっては、女性の地位の向上、そして、女性に対する差別をなくすという動きがこの宗教を中心に始まりました。そして、イスラム教によって女性の尊厳、少女の尊厳、そして生命の尊さというものを教えていったわけです。マホメットは、この女性に対する差別をなくすための大々的な運動も展開しました。

そして、「あなたの娘たちに対して、また結婚している女性に対して、安全を保証し教育を施す、そしてその人たちと一緒に生活していくということができれば、あなたたちは天国に行ける。」ということを教えました。しかしながら、この教えにもかかわらず、実際にはこの教えを誤ったかたちで解釈して、女性の地位を依然として低く見たり、あるいは場合によってはもっと女性の地位を低くするようなことに手をかすことが起こったことも事実であります。この誤った、男性の立場から見て主観的な、女性についての否定的な解釈というものが、その後多くのイスラム教の国々を支配してきました。このように女性は世界の至る所でいろいろなかたちで差別の対象となり、抑圧の対象となり、いろいろな苦難を強いられてきました。もちろんごく一部に例外はあったでしょうが、全体としていいますと常に女性は抑圧される、そういう立場の存在であったわけです。

女性解放の始まり

ということで人類の長い歴史の中で女性を解放しようという動きがでてきたのは、19世紀から今世紀にかけてのことでした。これは教育の発達、特に若い女性に対する教育の普及、それから、もう一つは女性の職を得る機会の広がり、こういったものが、非常に大きな影響を与えました。また他方で、戦争、特に第2次世界大戦のような大きな戦争の中で、男の人が戦争にかりたてられ、女性が職場を守らなければいけなくなったというような状況もありました。さらにもう一つの大きな要素は、情報が非常に速く世界を動くようになり、そして世界の主要な活動の場から非常に遠いところにある

僻地であっても情報がすぐに流れるようになった、この結果として、そのような所に住む女性を含めて、女性たちが自分たちも同じ人間なのだということを自覚するようになったということです。しかしながら、こういう女性の、自分たちも人間だという認識、そして男性の中の一部のそれを認める動きも実際に社会の中で定着するには時間がかかりました。とりわけ、女性が自分たちで自信をもって、自分たちも社会の一員であるということを感じるようになるまでには時間がかかりました。そうなるにあたって、まず言葉や考えの中での変化が起こったわけですが、その点は非常に印象的でした。言葉で書かれたもの、言われたこと、そして教えられたことに女性は平等だという動きがでてきた、これは非常に印象的でしたが、実際に女性の地位がそれにともなって変わるという、事実の上での女性の平等というのはなかなかそれに追いつくものではありませんでした。フランスのある哲学者が19世紀にこう言っています。「人類の完全な平等が達成され、文明というものが明確なかたちで人類に享受されるようになるには、人類の半分を占める女性が平等にその生活を共有しなければいけない」ということを言っています。同様のことはエジプトの著名な学者、カセン・アミンという人が次のように言っています。「女性を差別するという制度があるもとでは、どの国の地域も発展することはできない。その理由は人口の半分の女性を発展のために十分に貢献させていないからだ。」

国連と女性の地位

こういうことで理念の上では女性の解放というのが19世紀から20世紀にかけて起こったわけですが、これが国家のレベルで具体化するには、非常に長い時間がかかりました。ほんとうに長い時間がかかりましたが、1945年につくられた国連において女性を平等に扱い、女性を差別から解放するという動きが始まりました。国連憲章の前文では、皆さんもご存知の通り、基本的人権に対する信頼を回復して、そして人間が尊厳をもって平等に、男性と女性が平等に存在する、ということ明文で謳っております。この国連憲章という文書は、全ての国連加盟国を拘束するもので、従って加盟国はこの原文にかかっている文章に拘束されているということになります。この憲章の規定に基づきまして、1946年には女性の地位委員会というものがつくられ、そこで女性の地位を向上させ、特に政治的、経済的、市民的、社会的、あるいは教育的な分野での女性の権利を擁護する、そしてそれを促進する、そういう問題について経済社会理事会に勧告する任務をこの女性の地位委員会に与えました。それから十数年の期間が要されましたけれども、1960年以降になって国連総会は、そしてまた国連の専門機関は、女性を一層差別から解放する、そういう活動により多くの注意をはらうようになりました。

女性の地位の向上

この国連による女性の問題に対する関心というものは、実は女性自身がいろいろな国連の活動に直接参加するようになって一層おし進められました。とりわけ、この国連の場における女性の地位の向上に大きな役割を果たした要素が三つあると思います。その一つは、多くの国において女性が参政権を得たということです。二番目は、女性に限らず有色人種、いわゆるヨーロッパ系の白人以外の人たちが、「自分たちもやはり人間である、対等平等である。」という自覚をもったことです。そして第三番目は、それまで植民地におかれて主体的な政治を行っていなかった植民地の人々が解放されて、いわゆる植民地解放が起こった、ということです。特に、この第三番目の要素、植民地解放というものが非常に大きな要素を占めました。というのは、植民地から解放されたアフリカの国々、とりわけその国々の女性たちが非常な情熱をもって国連の様々な活動、その中でも国連総会の女性の解放、男女の平等の問題を扱う委員会にいろいろなかたちで積極的に参加するようになったからです。彼女たちのこうした活動は、アフリカの女性だけではなく、アジアからの女性、ラテンアメリカからくる女性にも影響を与え、その活動を通じて国連の場で女性を解放するための様々な宣言、条約案、あるいはその他の決議というものが採択されるようになりました。

そして、今日私たちは女性の地位というものが、国連を通じて一層はっきりと確立されるようになってきていることを認識しています。しかし、女性の地位委員会というものがつくられてから1992年の頃までの間を見ても、その間にも、いろいろな女性の問題について決議や条約案がつけられてきましたが、そこにおいて本当に女性の問題に正面から取り組むというようなことはしていなかったように思います。国連憲章自身には、第一条において国連の目的の一つとして人権と基本的自由、とりわけ全てのものための、人種、性、言語、あるいは宗教上の差別のない、人権と基本的自由の尊重の促進を国際的協力により達成する、ということが書かれていますけれども、ほんとうにそのように国連が動くということはまだこの頃はなかったと思います。例えば、女性の生理的な権利とか、あるいは結婚した女性の国籍の問題、合法的に結婚できる年齢といったようなことについての反対が国連の場で行われるようになりました。その問題については例えば、経済社会理事会、あるいは女性の地位委員会といったものが扱うようになりました。しかしそこで扱われた女性の問題は、実は女性というものを一つの社会問題の一面として捉えていたにすぎませんでした。それがどういことかというと、女性は弱い立場にいる人々という捉え方、子どものように、あるいは障害を持つ人たちのように、あるいは高齢者のように社会が保護してあげなければいけない対象、そのような捉え方でこれらの問題を扱っていたと思います。

実際、多くの政府にとって女性の問題は未成年者と同じような扱いでありました。そして実際、女性たちも十分な教育を受けなかったことからくる無知、そしてその他の非常に遅れた習慣、偏見などによって、そういう立場を受け入れざるを得ない状況にありました。そして、非常に意識をもって国連の場に来た人たちも、この圧倒的な既存の女性に対する間違った考え方、この規制された考え方をただ受け入れざるを得ないという状況でありました。そして国連の場で審議が行われる時には、各国の代表は各国政府から訓令を受けて、それに基づいて発言、行動するわけですが、それもまた、今言ったような誤った規制の概念に基づいて行われるものでした。つまり、女性は社会問題の一つだという捉え方です。実を言いますと、私自身も国連に来た時、そういう考えをもっていました。要するに、国連の場においては女性の問題というのは一つの社会問題だ、その問題の討議については国連の中の社会問題という議題の中で扱うということでありました。

忘れられた女性たち

私自身そういう考えで国連に来ましたが、どうして自分を含めて、人々はこのような考え方をするのだろうと疑問を持つようになりました。とりわけ西洋出身の女性たち、もう既に国連の場で活躍している西洋の女性たちも、この限られた偏った女性問題の扱われ方についておかしいという問題提起をしない、これはどうしてだろうということを考えました。私はこの問題について「女性は女性として、人間として生まれながらの権利を持っている。」というごくあたりまえの考え方をどうして皆が持って、それに向けて国連の場で行動しないのか、ということを考えてわけです。ところで、この問題に対する一つの答えを私は、実は1946年2月12日のニュージーランドの代表が第一回目の国連総会で発言した、その言葉の中に発見しました。この総会の中で女性の地位委員会も設立されたわけですが、このニュージーランドの代表は女性でしたが、彼女は国連憲章の女性の平等の問題についての規定をどうするかというようなことを議論しても何もでてこない、そんなことは必要ではない、そうではなくてもっと必要なことは、具体的な女性の権利が国連が直面している経済的社会的問題の解決にとってどういうふう位置づけられ、そして女性がどのように参加するか、ということではなくてはいけない、ただ単に女性が一つの議題として扱われるというのではなく、女性自身が国連が扱おうとしている経済的社会的問題に対してどう取り組んでいくか、どう取り組めるか、そういう問題の捉え方をすることを提起しました。このニュージーランドの女性の発言というものの中に私は一つの発見をしたのです。

しかしながら、このニュージーランドの女性の発言というのは、依然として私にとってはショック

グな出来事でありました。そしてまたそれは、ある意味で私に対して非常な怒りを覚えさせるようなものであったわけです。1946年の第一回目の国連総会において、11の国がその代表の中に女性を含めました。その女性の数は全部で17人でした。ところでこれらの女性を代表に含めた国々は、いずれも西側の、ヨーロッパの国々の代表団でした。そして、これらの人たちが発言したことは、いずれも、それぞれ西側の国、つまり欧米において、自分たちの国を戦争から再建するその場合に、女性がどういう役割を果たすか？そして女性がどう平等に扱われるか？自分たちの国がよくなるために女性が何をなすべきか？というようなトーンで発言していたわけです。彼女たちには、世界中みわたした時に何億という数多くのヨーロッパの国以外に住んでいる国の女性たちのことは全く念頭においていないということを感じました。この国連の女性問題の審議において忘れられていた女性たちが、やがて国連の場で注目されるわけですが、そういう状況に至るまでには結局のところ、新興独立諸国が国連に加盟を許されるまで待たねばなりませんでした。

女性と発展への権利

ところで60年代の後半になりますと、国連もようやく女性問題についての、この古い態度を変え、新しい姿勢を示すようになりました。これは発展途上国が国連に加盟し、そしてそれらの国々の要求によって開発の問題が大きくクローズアップされたからです。1969年に国連総会では「進歩と社会的発展の決議」が採択されました。実は先進諸国は、この決議には賛成ではなく、途上国の要求によってこれが採択されたのですが、この決議において初めて、女性が開発の問題についてどういう役割を果たせるか、開発の問題について女性がどういう位置を占めるか、男性と同様の地位でどうやって開発に貢献できるか、ということが扱われました。この努力はやがて各国家に同じような考え方を持つように影響を与えるようになりました。そして女性が社会の発展、開発の過程でどういう地位と役割を果たすか、ということが各国によって議論されるようになっていったわけです。同時にまた、国連のいろいろな機関、関連制度・組織において、同様の動きが出始めました。そして最初の世界女性会議というものがメキシコで1975年に開かれました。その時の共通のタイトルは、「平等・発展・平和」というものでした。この会議の一つの結論というのは、「男性と同様に女性はその国の発展にどう貢献できるか」ということでした。つまり、女性が発展のための一つの重要な主体として認められたということです。

さらに、この問題はもう一步進むようになりまして、ただ単に女性が開発の問題にどうかかわるか、主体的にかかわるか、という問題だけではなくて、一步進んで開発の果実を女性がどう共有するか、

シェアするか、という問題に発展しました。それ以降、女性というのはただ単に開発・発展のための主体的な要素だけではなくて、その開発の成果を享受する主体でもあるという捉え方が定着していきました。このことは1985年のナイロビにおける第三回世界女性会議において次のようなかたちで確認されました。女性は男性と一緒に、男性と共に発展に向けての努力をするという当然の権利があるけれども、同時にその発展から得られた利益を男性と同様に享受する権利もあるということが、そこで謳われたわけです。この開発に関する考え方の発展、変化というものは大変重要な前進、大きな一歩であったと思います。これによって、ただ単に開発というものを、それまでのように経済学上あるいは統計上の数字で、これだけ増えたから発展が進んだというような捉え方をするのではなくて、人間に着目して、一人一人の人間が経済、社会、文化、市民生活、あるいは政治的な生活、その他、あらゆる分野において、人間としてどこまで発展したか、ということを経験の基準にしなければならないという考えにつながっていくからです。

女性の権利は人権である

この問題に対する一般的な関心の強まりにもかかわらず、実際にこの女性の問題に対する国連の、そして国連の主催する会議の立場がより正しい方向に向ったのは、1992年のウィーンにおける世界人権会議であったわけです。(注:1992年といったのは、この時期に世界人権会議に向けての準備委員会というものが進行していて、ワルザジさんがその準備委員会の議長をしておられ、その場でいろいろと経験しことを今話されているため)

この時に、何を議論したかと言いますと、一つは、世界人権会議において何を議論するかという議題の問題でした。この問題についても、既にいろいろな立場の違いがあって困難に直面しました。その結果として、私はその準備委員会で、全部議論して合意を得て進めるということをやめにして、自分がそれまでの議論に基づいて整理した議題というものを直接国連総会に送るといって、多少異例の手続きをとったということを説明されました。その中に私自身が一つ入れたことは、女性に対する敬意を払う、女性問題に対する十分な敬意を払うということでしたが、その一つの現れとして、第11議題に次のようなものを加えました。それは何かと言いますと、女性と男性の権利が、この女性と男性の権利というものの中には、弱い立場の人々、子どもとか、あるいは障害者とか、そういう人たちをも含めた全ての男性と女性の権利が完全に守られる、そういう状況についてどういう発展があったか、そしてまた、その障害になるもの、平等な権利の障害になるものは何か、ということを検討する、そういう議題でした。皆さんもお気づきのように、ここでは私は、女性の問題をまず、弱い

立場の人々の問題と切り離して考えました。つまり、その人たちも含めた全ての問題という捉え方をしました。それから、同時に女性の問題を未成年者の問題などからはずして、女性、男性を区別しないで、どうしたら全ての人に対して差別なく社会の発展というものが享受され、そしてそれがまた、全ての人に利益が還元できるようになるのかということについて、全世界にその平等な扱いを広げるにはどうしたらよいか、ということを考えようとしたわけです。1993年のウィーンにおける世界人権会議、これは女性にとっても大変な勝利であったと思います。これによって初めて国際法上、女性も男性と同様主体として位置づけられました。その世界人権会議において採択されたウィーン宣言の中の、とりわけ、「平等・尊厳そして寛容」と題されている章において、世界人権会議は女性によってあらゆる権利が享受されなければいけない、そしてその問題は各国家の、及び国連機関の最も重要な議題として扱われなければいけない、と規定されました。さらに、女性の地位と女性の人権の問題があらゆる国連の活動の中心に位置づけられなければいけない、ということも規定されました。

そして、1995年に北京で開かれた第四回女性会議について、わたしはそれまでの女性会議の中でも最も成功した、女性にとって大きな意味のある会合であったと思います。その会議において採択された宣言・行動計画においては、あらゆる問題が非常に明確に打ち出されました。そして女性の直面するあらゆる問題が的確に分析され、議論され、結論がだされました。そこで議論されなかった女性の問題は一つもなかったと言っていいと思います。ご存知の通り、人権の問題、そして女性の問題は1993年のそれまで、南北対立という流れの中で受け止められることが多く、それが、非常に問題を政治化してきました。けれども、北京の女性会議においてはこの問題がそういうかたちで政治的に扱われるということはありませんでした。人権は女性の権利である、という明確な立場が北京女性会議において確認されました。

それでも残る障壁の数々

ということで、女性の権利は人権であるという考え方、これが北京で確認されたことは動かし難い確信になっています。しかし、それにもかかわらず、こうした女性の権利が実際に実行に移され、本当に女性が男性と平等になるには、まだまだ多くのことをしなければなりません。この先、この女性の権利を実施していく上で、我々はかなり時間を要するだろうと感じます。現在のところ、世界において依然として非常に多くの女性がいろいろなかたちで貧困、とりわけpovertyと呼ばれる極端な貧困から解放されずにそのもとで苦しんでいます。そしてまた、そういう女性たちは搾取され、い

ろいろなかたちで暴力の対象となり、レイプをされ、また、時には売春行為をせざるを得ない、強制的にさせられる、というようなことも起こっていますし、さらには現代的な奴隷性の被害も受けています。戦争が起こりますと、とりわけ最近多くなった内戦の中では、女性は第一の被害者になります。このことは、私たちもボスニア・ヘルツェゴビナの内戦でよく知っていることです。こういう危機的な状況の中で、男性というものが突然ひどい動物と化するというのを私たちは実際に知ったわけです。そこでは集団として男性が女性たちをレイプし、そしてひどい仕返しのための道具として女性を攻撃するというようなことが行われているわけです。こういう人類に対する、人間性に対する犯罪については厳しくこれを処罰していかなければいけないと思います。こういう現象が、実はボスニアだけではなく、リベリアでも、ブルンジでも、ルアンダでも、そしてまたコンゴでも、これらはいずれもアフリカの国なのですが、大変残念なことに、これらの国々で起こっています。全く理由にもならない理由によって、女性たちが殺され、レイプの犠牲者となり、被害を受けているわけです。

こういうようなかたちで多くの国において、女性の尊厳、女性の生命というものが、ほとんど意味のない、価値のないものとして捨てられているという状況があります。同時に非常に極端な宗教的なグループもまた、女性たちを苦しめています。そしてその宗教的なグループは子どもたちを拷問にかけたり、とりわけ親の目の前で拷問にかけたり、あるいは若い少女たちを連れ去ったり、その家族の前で殺したりというようなひどいことをやっています。アフガニスタンでは、女性は中世の全く人権が無視された頃と変わらない状況に追いやられつつあります。ご存じの通りアフガニスタンはイスラム教国ですけれども、これはそのイスラムの教えに全く反した行動だと言わざるを得ません。アフガニスタンでは、学校や病院が女性たちには解放されなくなってしまいました。そして、移動の自由、旅行の自由のようなものさえ認められなくなりました。そして女性であるというだけで、常に怯えた生活をしなければならなくなっています。現在、女性に対する暴力については、世界のいろいろなところで事態が悪くなりつつあるように思います。女性、そして少女たちは、夫に、あるいは父親に暴力で苦しめられたり、時には道でレイプの被害者になったり、その他いろいろなかたちで傷ついています。今日こういった問題について国際社会は当然のことですが、女性に対する暴力をなくそうという運動に動きはじめています。国連の場においてもご存知の通り、人権委員会は女性に対する暴力に関する特別報告者というものを任命し、その人に女性がおかれている状況、とりわけ暴力に苦しめられている状況について国連に報告するように任務を与えています。

国連は現在、こうした各国政府が特に女性の問題についてをどういうふうに扱っているかということ詳しく検討していますが、その中でも女性、少女たちが肉体的あるいは精神的に被害を受けている、伝統的な慣習、慣行について検討しています。このための行動計画も国際的なレベルで採

扱われています。これらの女性に対する悪影響を及ぼす慣行の中には、例えば、女性の性器切除というようなこともあります。この慣行によって、アフリカの国を中心とした30か国以上において、1億3千万を超える女性とその被害者となっています。親が男の子の方を望むというような慣行も世界各地に広まっています。とりわけ、男女を産み分けるといいますか、男の子を望むので男の子を産む、というような慣行は幾つかのアジアの国で非常に顕著に見られます。それからご存知の通り、ダーウィという、これも女性に対するひどい暴力ですが、ご主人が亡くなって未亡人となった女性が、場合によってはご主人と一緒に焼かれる、というような慣行が残っているところもあるのです。それから、女性に対して強制的な卵巣手術をするというようなことが行われている所もあります。ユニセフによりますと、この女性に対する暴力というのは、人権の侵害の中でも、最も幅広く世界で行われているものであると言われています。このような状況というのは先進国を含め、世界のあらゆるところで起こっています。途上国だけではなくて、先進国でも起こっているということを強調したいと思います。

実現への努力

この現在の状況というのは、国際社会が常に流動的になってきているということをひとつ反映していると思います。全ての国際社会の構成員、そして国家というものがこの問題に直面しているといえます。女性の地位や権利を促進する、そういう活動を各国政府や国際社会が進める場合、私たちは三つの要素に依存しなければならないと思います。まず第一に、各国政府が女性の地位を向上させ、そして国際社会で合意された基準を十分に守って、その義務を履行する、それだけの政治的な意志があるかどうか、ということです。第二番目は、全ての女性に、とりわけ文字を読んだり書いたりすることのできない人々の多くが女性であるということを前提にしますと、この女性たちに十分な教育を施すということも一つの重要な要素です。そして第三番目に、女性に対する暴力、その他、女性に対する差別の被害者となっている人たち、この人たちに対して手を差し伸べて、彼女たちが救いを求めた場合に、この人たちに連帯感を示し協力の手を差し伸べる、ということだと思います。

最初の、政府に女性の地位を向上させる意志があるかどうか、政治的な意志があるかどうかということについては、第一に、よく言われるaffirmative action、積極的に差別を解消するための行動、ということになると思いますけれども、それを行うことが一つの重要な意味をもつと思います。女性に対して大学への進学、職場の解放、あるいは政府の主要なポストに女性をつきさせる、というような時にこのaffirmative actionは大変重要な意味をもつと思います。最近の数字統計を見ますと、世界全体を見渡した時に、議会において女性が占める割合は9%だと言われています。そし

てまた、政府等の重要な意志決定を行うポストについている女性は、わずか4%にすぎないと言われています。しかし、いくつかの政府、政党等では最近、女性に男性と平等な政治的な活動をする場を保障するための割り当てを決めようという動きが出ています。例えば、つい先月のことですが、フランスで首相が次のようなことを憲法に新たに盛り込もうと提案しました。それは、女性が男性とあらゆる分野において平等に参加する、その権利を保障する、この「平等に」というのは全く平等、fifty-fifty、半分ずつ、そういう考え方です。これはまさに政府のそういう方向に向けての政治的な意思を表明する一つの形であろうと思います。

さらに、この女性の地位の向上の問題を考える場合、女性だけでそれが実現できると思ったら、それは大きな誤りだと思います。そのためには男性の協力が絶対に不可欠です。その場合、お互いに相手の立場や気持ちを尊重し、お互いに対話を進め、そしてお互いに相手を説得する、そういう根気のある仕事が必要です。それを通じて初めて目的が実現できると思います。政治家は、女性というものをただ単に自分が選挙で勝つための票であると考えてはなりません。権威とか権力といったものは、人類の半分、時には半分以上を構成する女性が、男性と一緒にそれをシェアするものでなければなりません。そしてまた、もう一つ言いたいことは、たまたまこういう中で責任ある地位についた女性、先ほど言いましたように数は少ないのですが、そういう人たちは自分がそういう地位についたからといって、後は人の問題だといって黙ってはいはならないと思います。女性は他の苦しんでいる女性のことを考え、そして高い地位についた女性はそのために一定の重要な役割を果たすことができる、それによって他の苦しんでいる女性たちを早く解放することができると思います。

モロッコの試み

私の国(モロッコ)においては最近、女性の団体(NGO)がこういう女性の地位、特に女性のイメージの改善に大変大きな貢献をするようになってきました。この動きは、1946年に当時の国王モハメット5世が行なった次の行動によって始められたといってもよいと思います。それが何かといいますと、女性が公式の場で発言をする時に、それまではベール被っていたのですが、モハメット5世の長女が話す時に、初めてそのベールをとって素顔で話をしたことです。このことは女性もベールをとって男性と同じように政治的な活動をすることができるということを、明確に一般国民に示す非常に大きな意味をもっていったと思います。ご存知の通り、モロッコの国王というのは、国家元首であると同時に国軍の司令官でもあり、そういう意味でも国王その人が、自分の娘を政治的な役割を果たす一つの象徴として示したということに大きな意味があったと思います。1992年に採択された憲

法の規定では第5条において、全てのモロッコ人は法の前に平等であるということを謳っています。現在、モロッコでは、エンジニアも医者も飛行機のパイロットも、大学の先生も、外交官も、芸術家も、スポーツにおける金メダルをとる人も含めて女性と男性が一緒にシェアしているという状況が生まれています。しかしながら、そのモロッコでも大臣に女性になる、あるいは議会の議員になるということになりますと、非常に難しい問題が残っています。この、女性が最終的に男性と平等になる、あらゆる分野で平等になるということには非常に長い時間がかかります。特に、権力というものを女性が男性と一緒にシェアするということが大変難しいことです。

モロッコでもいろいろなことが起こっていますが、ある調査結果によりますと、モロッコではいろいろな分野で女性の地位が向上している、女性に対する差別がなくなりつつあるとはいえ、依然として乗り越えるべき大きな問題が目の前にあって、それは法そのものを国民、特に女性がよく知らないということ、そして法自体、実は非常に時代遅れのものになっていること、とりわけ家族に関する法、つまり家族法が遅れている、それから、少し何か新しいことをしようと思うと男性がそれに抵抗することなどです。そして、もう一つ、とりわけ大きなことが女性の教育の不徹底ということ、これが非常に問題を大きくしています。しかし、その報告書が同時に言っているように、モロッコの女性は自分自身が何を望んでいるかをよく知っている、そこで、この望むことを実現するため、特に家族において女性に対する暴力などをなくすために努力をしなければいけない、モロッコの女性はまた、男性が支配している社会において男性と同等の地位を確保したいと望んでいる、これもはっきりわかっている、政治生活においてやはり男性と同様の活動をしたいと思っている、これもよくわかっている、国家の発展に協力したい、貢献したい、これもよくわかっています。このモロッコの女性の気持ちというのは、今日、全世界の女性によって共有されている問題であると思います。この目的を達成するためには、女性がもっと戦略的に強い地位に立つことが必要であろうと思われます。そのために重要なことは、マス・メディア、あるいは情報というものについて女性がもっと力を入れることだと思います。私たちのこれまでの研究成果によりますと、政府というものは世論による圧力を絶えず受けていないときちんとしたかたちで問題に対応しないから、女性に対する差別も同様に世論によって圧力を継続してかけるということが重要だと思います。

今後の課題

最後に、次のように私は言いたいと思います。この問題の解決のためには、女性が自らの将来に立ち向かわなければいけないということです。女性に対する無知、偏見、差別といったものを解決

するためには、将来女性自身がそれに立ち向かっていく必要があると思います。来る21世紀は、この問題の最終的な解決の世紀になると確信いたします。そして、平等な社会を実現する上で、やはり女性が決定的な、非常に重要な役割を果たすと思います。平和の問題、安全保障の問題、これが国際的なレベルであれ国内のレベルであれ、その問題の解決には女性が関与しなければなりません。また、人権の促進、あるいは環境の保護、こういった問題についても女性が積極的に関与する必要があります。女性がこの役割を将来確実に果たす能力があるということについては、私は何の疑問も持っていません。というのは、これまで女性は活躍の場を限られてはいたけれども、家族や家庭の中での役割を立派に果たしてきた、それを国や世界全体に広げること、これは決して不可能ではないと考えるからです。さて、女性に対する不平等、不公正、そしてまたあらゆるかたちの暴力といったようなものについては、これらを一挙になくすことはおそらくできないでしょう。けれども、最後にアメリカのジョージ・マテュ・アダムスという作家の言った言葉を引用して私の話を終わりたいと思います。「私たちの人生において目指すものがあるとき、私たちがそれを求め、そのために闘い、そして自分自身を犠牲にする覚悟があれば、それは達成できるでしょう。」という言葉です。どうもご静聴ありがとうございました。

質疑応答

<質問> 国際女性の地位協会の山下泰子と申します。人権の問題を勉強してきた一人ですが、ワルザジさんのお話を大変印象深く伺いました。一つ疑問があるのですが、それは「人権というものは女性の人権とか男性の人権とかに分けることができない」と最初におっしゃったことに関して私も全く同感なのですが、後半にワルザジさんがご指摘になった、例えば「女性に対する暴力の問題」というようなこと、あるいは、カイロの1994年の会議で問題になったリプロダクティブ・ライツreproductive rightsというようなことについては、女性特有の人権というよう問題の部分もあるのかな、と私は最近思うようになってきています。そのあたりについてどのようにお考えか、もう一度伺いたと思います。

<答> ご意見には全く賛成です。もう一言付け加えるならば、私はいわゆる「ウーマン・リブ」、女性解放運動の非常に固まった立場の人たちだと思いますが、それには賛成しません。もちろん、女性の人権というよりも、人権は人の権利だと思います。しかし、他方で女性が生物学的に男性とは違った特性をもっていること、これは事実として認めなければなりません。そこで、人権の問題を扱う

場合に、これを男女の問題、ジェンダーの問題というかたちで見て、時には女性が男性とは生物学的に違った特性をもっていることからくる違った権利、違った扱いというものがあるとすれば、これは女性の立場からの特権として持ち続けなければならないと考えます。例えば、具体的な例として、子どもを産んだ女性がその後6ヶ月間、普通に給料をもらいながら休むことができる、育児休暇というものがありますが、これは女性の立場からして当然のことだと思えます。ある固まった考え方、アメリカなどにあるウーマン・リブの考え方ですと、女性は男性と同じだという考え方を持っているように思いますが、事実は男性と女性には生物学的な違いもある、その違いから出てくる女性の必要とするもの、男性はその違いのために必要としない、という場合にその女性が必要としているものを、それは人間として必要としていることだとして、それに対して特別な法律上の保護を与え、実際にもそれが認められるということは、むしろ大切なことなのではないか、従って、結論的には山下さんのご意見に賛成だということです。

<質問> 国際女性の地位協会の堀口悦子と申します。先ほどのお話の中でモロッコでも家族法の問題が大きいとおっしゃっておられましたが、日本でも今、家族法の改正がちょっと頓挫しておりまして、特に、結婚している女性の個人の氏名権が侵害されているという事実があることをお知らせしておきたいと思えます。私がさせて頂きたい質問は、先ほどおっしゃったaffirmative actionについて、私自身も法律関係の研究をしているのですが、モロッコでも女性が何かしようとする男性が反対するということで、「日本でもaffirmative actionを」ということを言おうとすると、affirmative actionと言っただけで、それは逆差別なのだという反応が返ってきます。ワルザジさんはこの問題について具体的にどうお考えか、特にアジアにおけるaffirmative actionの実効的な措置というのがあれば、例えばその実例とか方策のようなものを教えて頂ければ、それを我々女性のNGOが政府や意思決定機関に働きかけていきたいと思えますので、是非教えて頂きたいと思えます。具体的な方策をお願い致します。

<答> 名前の問題については、たまたまですけれども、イスラムの国から来ている私のような場合には実はあまり問題がありません。それはイスラムの習慣では、女性は結婚しても女性の名前を、つまり父親からの名前をそのまま持ち続けていて、私の場合で言えばハリマ・W・ワルザジとなっていますが、このワルザジというのは「ワルザジの夫人の」ということであって、自分の名前の一部にはなっていないのでそういう問題は起こりません。家族法についてはそれよりもっと大きな問題がモロッコにはあります。例えば、離婚した女性の場合、あらゆるところで地位がなく、いろいろな権利が

認められていないために、離婚したとたん生活ができなくなるという深刻な問題があって、そちらの方が大事です。

ところで、そのaffirmative actionについてですけれども、これを逆差別だという議論があるということはよく知っておりまして、モロッコでもおそらく男性はすぐそういうことを言いだすと思います。しかし、これは逆差別でも何でもない、勿論差別でもない、女性が男性と平等になる時までの一つの手段であって、そのことは実際にいろいろな国際的な人権に関する文書の中で明確に規定されています。差別されている人たちが差別の状況をなくすために、ある段階になるまで特別な扱いを受けるといふことは、これは当然のことだというように考えられているので、その方向に向けて努力していくべきではないでしょうか。アメリカの場合には、女性ばかりではなくて有色人種、あるいはアフリカ出身の人たちがやはり、そのaffirmative actionで平等になる方向性が与えられています。この方向性というのは、発展途上国やアフリカの国々が主張したというよりも、実は最も人権についての考えが進んでいると言われるスウェーデンでそもそも初めに始まったということが、まさにこれが人権を進めるものであって人権を侵害するものではない、ということを示す一つの証拠になるでしょう。このaffirmative actionについては人権小委員会で現在研究が進められているので、是非この問題を皆さんも注目していただきたいと思います。

横田(通訳者):まだまだ、ご質問があるかと思いますが、もう既に予定の時間を超えています。お疲れのところこれ以上ひきとめるわけにもいきませんので、これで今日の講演会を終わりたいと思います。

最後に、この講演会の主催者の一人でいっしょに、「国際女性の地位協会」の代表・山下さんにちょっと一言発言をお願いしたいと思います。

——山下代表挨拶。

横田:大変中身のある、わかりやすいお話でしたので、長時間が長時間と感ぜられなかったような気が致しますが、おそらく皆さんもそうであったと思います。ここで、ワルザジさんにもう一度感謝の拍手を差し上げたいと思います。

——拍手。

横田:それではどうもお疲れ様でした。これで今日の講演会を終わりに致します。

(了)

(財) 女性のためのアジア平和国民基金 (アジア女性基金)

アジア女性基金は、1995年7月、日本軍が関与して「慰安婦」とされた被害者の癒しがたい苦しみを受け止め、少しでもその苦しみが緩和されるよう力を尽くし行動することが、耐え難い犠牲を強いた日本の責任を表すとの認識から、市民と政府が一体となって発足いたしました。従って、基金の目的の一つは、「慰安婦」制度の被害者への国民的な償い事業です。それは、1) 被害者の方々の苦悩を受け止め、心からの償いを示す事業、2) 国としての率直なお詫びと反省の表明、3) 政府の資金による医療・福祉支援事業、4) 「慰安婦」問題を歴史の教訓とするための事業です。被害者の方々は、長い間沈黙を強いられ、高齢となられた今、償いに残された時間は限られています。そのため、アジア女性基金としては、一刻も早く日本の道義的責任を具体的に表したいという気持ちで、この事業に取り組んでいます。

同時に、女性に対する差別や暴力が「慰安婦」問題を生んだ背景にあるとの認識から、アジア女性基金のもう一つの目的は、今日の問題である女性への暴力あるいは人権侵害に対して、積極的に取り組み、二度と「慰安婦」問題を生まない社会を作る事業です。その活動には：

- 女性が今日直面している問題についての国際会議の開催
- 女性の人権問題に様々な角度から取り組んでいる女性の団体への支援活動
- 女性に対する暴力、あるいは、女性に対する人権侵害について
の原因と防止に関する調査・研究
- 暴力や人権侵害の被害女性に対するカウンセリングおよび
自立支援等があります。

基金の事業や活動についてのお問い合わせ、出版物のリスト等をご希望の方は、下記の住所にご連絡下さい。なお、インターネットでも基金の活動はご覧になれます。

住所: 107-0052 東京都港区赤坂 2-17-42

TEL: 03-3583-9322

FAX: 03-3583-9321

e-mail: dignity@awf.or.jp website: <http://www.awf.or.jp>

The Human Rights of Women

Ms. Halima E. Warzazi ⁱ

Chairperson, United Nations Sub-committee on Human Rights,
Working Group on Contemporary Forms of Slavery

Speech given at the ANA Hotel, Tokyo, 6th April 1998

In dealing with this issue, which is perhaps one of the priorities of the international community, we must look back to the historical record in order to evaluate the progress of women around the world. We know that thousands of years ago, men personified power both inside and outside the family. According to the Egyptian sociologist Nawal El Saaadawi, in matriarchal societies women, through their contribution to agriculture, were equal to men, and their supremacy in family structures was ensured. During that period the social concepts of hierarchy, class, master and slave were unknown in the community.

However with the introduction of new techniques of production, common land was gradually transformed into private property. These new notions of property and inheritance put an end to the foundations of matriarchy and have led to the development of social systems repressive to women. Women were deprived of the dominant role they had played in the family and the community, and instead became 'objects,' belonging to a father, husband and family, and they were excluded from the religious fields where they had enjoyed equality with men.

Thus it is not surprising to learn that centuries ago theologians in Europe contributed to the degradation of the condition of women, accusing them of all the sins, including the original one. The woman was considered as an animal whose value was determined by her usefulness, and the same discriminatory treatment was also common in other parts of the world. Manou, who brought the tables of law to the Indian people said, "Child, the female must depend on her father, a young woman on her husband, a widow on her sons – a woman must never be independent." Confucius defined the role of women in one verb – "to obey," and for Buddha, woman was the personification of evil. In the pre-Islamic societies, the birth of a girl was considered a curse, and it was the custom to bury the girl alive immediately following the birth, which was the job of the father or another man of the family. This tradition was abolished by Islam, which severely condemned the practice. One surate of the holy Koran said to those who justified it for reasons of poverty: "Do not kill your children because of fear of poverty. We will secure their nutrition as well as yours. The murder you are committing is a horrible sin."

Islam was the first religion which, in the seventh century, dealt with the condition of women in the Arabic peninsula to combat discrimination against them, dictating respect for life and the dignity and rights of women and girls. The prophet campaigned against discrimination against women, and even pronounced: "All those who ensure security, education, and marriage for their daughters will be entitled to go to paradise." This did not prevent men from interpreting some surates of the holy Koran according to their own interests. Their subjective interpretation had negative consequences for the condition of women in most Moslem countries.

Therefore, women all over the world, with perhaps a very few exceptions, have for many centuries endured segregation, oppression, and sufferings in silence, accepting their unfortunate fate with resignation.

It is only at the end of the 19th century and the beginning of the present one that changes begin to occur. As a result of the extension of education to girls, access to work outside the home due to the absence of men mobilised for the Second World War, as well as the improved flow of information to even the most remote parts of the world that women have discovered their existence as human beings entitled them to be considered as full members of their communities.

However in order to be recognised as such it was necessary for patriarchal societies to put an end to discriminatory preconceptions and to allow women to occupy their rightful place in the community. The change that followed this discovery by women was an impressive one in theory, but rather less so in reality. However, the world has certainly realised what one French author, commenting on the situation of women in his country, wrote in the 19th century: "access of women to a perfect equality will be the biggest manifestation of civilisation and will double the intellectual strength of the human species." Moreover at about the same time in Egypt an eminent writer, Kassem Amin, was campaigning against discriminatory treatment of women, and said that it was impossible for a nation to be developed as long as it was deprived of the contribution of half of its population.

Nevertheless it took a long time for this conclusion to be accepted at the national level. In fact, the United Nations has endeavoured to realise this aim since 1945 when its

Charter, whose dispositions are mandatory for all the state members, was the first international instrument to advocate the principle of equality between men and women. It proclaims in its preamble, the determination of the members of the United Nations to "reaffirm faith in fundamental human rights, in the dignity and worth of the human person, in the equal rights of men and women.

In 1946, the Commission on the Status of Women (CSW) was established, with the task of preparing recommendations for the Economic and Social Council (ECOSOC) with the promotion of women's rights in the political, economic, civil, social and educational fields. However it is not until 1960 that the General Assembly of the UN and its specialised agencies began to pay more attention to all aspects of discrimination against women. This focus on the problems faced by women around the world was primarily due to the increasing participation of women in the work of the UN and other international forums. Besides that, let us not forget that in the 1960s three other important factors contributed to increased public awareness. These were;

1. female enfranchisement
2. The Civil Rights Movement in the USA
3. Decolonisation

This third factor determined the presence at the UN of African women, who brought their enthusiasm and innovative ideas to the Committee of the General Assembly, which deals with world social, cultural and humanitarian issues. Their genuine concerns, supported throughout the years by other women from Asia and Latin America, lead to a great number of new declarations, conventions and resolutions aimed at recognising and achieving equality between men and women.

However, what we must realise today is that from the beginning – that is to say from the establishment of the Commission on the Status of Women until 1992 – the international community did not examine the real issues of women, as it was in fact obliged to do under Article 1 of its Charter, which declares that "one of the purposes of the United Nations is to achieve international cooperation ... in promoting and encouraging respect for human rights and fundamental freedoms for all, without discrimination of race, sex, language, and religion."

It is true that the first texts adopted by the UN dealt with political rights of women, the nationality of married women and the minimum age for legal marriage, but in fact the UN and its organs, including ECOSOC, the CSW, the Commission for Social, Cultural and Humanitarian Questions, all considered the problems of women from a social aspect, and women were included within the list of vulnerable groups, such as children, the handicapped, and the elderly. In fact, for many governments, women were considered as minors. How could it be otherwise when the majority were seriously handicapped by their own ignorance, the weight of backward traditional practices and prejudices. When women delegates first arrived at the UN they found themselves obliged to face a fait accompli. They were furthermore under obligation to act in accordance with their governments' instructions. Moreover, coming from countries where the living conditions were harsh, these delegates did not hesitate to share the general opinion that women's problems were social ones.

I was, by that time, one of them.

Women's issues were always discussed under the social item of the agenda of the General Assembly. While I had followed the trend for many years I found myself one day trying to understand why the Western women delegates had never reacted against that unfortunate position, which was in my modest opinion, the main reason for the extended delay registered by the international community in effectively recognising human rights as the inherent rights of women. I found the answer to my question in a speech delivered by the delegate from New Zealand on the 12th February 1946 on the occasion of the creation of what was to become the Commission on the Status of Women at the first General Assembly of the United Nations. She said:

"There is no need to stress the necessity for pushing on the practical work in connection with the parts of our Charter which emphasise the equality of women But there is something more than winning the intellectual battle and something more than winning a political victory in various countries, and that is the economic and the social status of women ..during the course of the General Assembly meeting and the meeting of the Committees, the women delegates have been very busy endeavouring to see what was the best way in which the

questions of economic and social equality in respect to women could be pushed ahead.”

I found this declaration astonishing and felt my indignation rising.

In the first General Assembly of the UN in 1946, 17 women representatives and advisors from eleven member states took part in its work, most of them from Western countries. As such, they were only thinking of women from their own part of the world, in terms of the progress they had made during the war, and evaluating the kind of responsibilities they must accept in order to participate in the reconstruction and improvement of the standard of living of their countries, totally ignoring the question of human rights of the hundreds of millions of women in the rest of the world, who were unfortunately not represented at that time. We had to wait until the admission of the newly independent countries to the UN in order to hear about and begin to address all the issues concerning their people and their women.

By the end of the 1960s, the UN had begun to adopt a new attitude towards women due to discussion of the problems of development as a priority of the developing nations. In 1969 the Declaration on Progress and Social Development was adopted following long negotiations with developed countries, who had not been enthusiastic about it. This declaration was however a cause for celebration for women delegates as they realised that they could, through the debate on development, break through the wall of discrimination raised by men. Efforts deployed since that time have aimed to focus government attention on mobilising and integrating women in the progress and development of their countries. This question was among the major preoccupations of UN institutions.

The first International Conference on Women took place in Mexico in 1975 under the title “Equality, Development and Peace.” One of the conclusions of this conference was that women could and should contribute to the progress of the country. In one word, women were recognised as an essential **factor** in development. Subsequently, following the decision of the member states of the UN, a new step was taken to recognise the necessity of not only the full participation of women in the development process, but also to guarantee them the enjoyment of the fruits of this development.

They were from hereon to be recognised as both a factor as well as the beneficiaries of development.

This conclusion was very important as the notion of development has evolved in a positive way. It has finally been admitted that development must be evaluated not only by facts and figures dealing with income and economic growth, but also according to the development of the individual in the social, cultural, as well as civic and political fields. However, despite an increasing interest in these matters, a satisfactory conceptual framework for dealing with the problems of women was only finally agreed upon in 1992.

One year before the celebration of the 2nd World Conference on Human Rights, the initiative for which was taken by my country Morocco in 1989, I had to face a very difficult situation as president of the Preparatory Committee during the elaboration of the agenda of the conference. I had to forget the Preparatory Committee and to elaborate and submit the draft agenda directly to the General Assembly of the UN for adoption. While I was preparing the draft I decided to pay tribute to women by dedicating to them point 11, which read: "Examination of actual tendencies and new obstacles preventing the complete realisation of men and women's rights, including this of persons belonging to vulnerable groups." In doing so not only had I taken women off the list of vulnerable groups and consequently out of the social framework, but for the first time in the history of the United Nations, women's issues were occupying their rightful place in the field of human rights. From now on the status of 'minor' was forgotten, compassionate attitudes had no place, and social assistance programs were established under gender equality, while paternalism shown towards women's promotion was over.

The World Conference on Human Rights in 1993 was a success for women as it recognised women as subjects of international law in the same manner as men. In the chapter of the Declaration and the Program of Action entitled "Equality, Dignity and Tolerance," the World Conference urges the full and equal enjoyment by women of all human rights, which has to be a priority for governments and for the United Nations. It also underlines that the equal status of women and the human rights of women should be integrated into the mainstream of the UN system.

The Fourth World Conference on Women held in Beijing in 1996 was, in my opinion, the most successful of the four conferences held since 1975. There was no ambiguity in the Declaration and Platform for Action. All major problems were analysed and dealt with. Nothing was left out. The clash between North and South had this time little to do with politics. Women came to defend their rights. Once again, the stand was very clear: **human rights are women's rights**. Those reading the Declaration and Platform for Action of Beijing will be in no doubt of this fact.

However, despite all these fruitful events of the past decade, we must be lucid and realise that much more remains to be achieved in reality. In fact, not all that glitters is gold. Many of the decisions taken during the conferences of Vienna and Beijing will require a long time before being really implemented. The majority of the women in the world are suffering in situations of poverty, and even extreme poverty. Women are exploited, abused, raped, forced into prostitution and new forms of slavery. They are the first victims of war as well as of internal conflicts caused by ethnic, nationalistic and religious intolerance. Recently, the horrors of Bosnia have confirmed that men can be converted into terrible beasts capable of using collective and mass rape of innocent women as a dreadful weapon of revenge. This inhuman behaviour must effectively be punished as a crime against humanity. We found the same behaviour in Liberia, Burundi, Rwanda, and the Congo, where men kill, rape and destroy for the furtherance of their ugly cause.

Furthermore, there are countries where women's lives and dignity have no value. Fanatic religious and armed opposition groups slaughter women and girls, and torture children in front of their parents. They kidnap young girls and kill them after having raped them. In Afghanistan, women have been forced to go back to the dark ages in flagrant violation of Islam. Doors of schools, hospitals and work have been closed to them. They cannot move freely and they are under constant threat just for being women.

The incidence of violence against women is increasing in all parts of the world. Women and girls are battered by their husbands, raped in the street, or abused at home by the father or a family member without recourse. Today there is a wide campaign against this world-wide phenomenon, through the condemnations and sensitisation of

governments, and public information. The Human Rights Commission has appointed a Special Rapporteur who reports to the international community on the broad range of violence inflicted in women. The United Nations is also scrutinising the attitude of governments toward traditional practices which are harmful to the physical and mental health of girl-children and women. A plan of action has been adopted at the international level in order to condemn and put to an end these practices, including female genital mutilation, which affects more than one hundred and thirty million women and girls in thirty countries, mostly in Africa.

The preference accorded to the male also has a serious impact on the health and level of education of girls. This tradition is the cause of female infanticide and prenatal sex selection in some Asian countries. Dowry-related violence, widow immolation, and forced sterilisation are other serious violations committed against women. As reported by UNICEF in its last report, this violence "is the most pervasive form of abuse of human rights." It exists not only in our part of the world, but also in the developed countries. This means that still today "to be born a woman is to be born at risk." The present situation of women justifies a constant mobilisation of the international community, the government and all members of society.

The promotion of women and their access to the full enjoyment of all human rights as provided in the international instruments relies primarily on three factors:

1. The political will of governments to implement programmes of action in favour of women;
2. The extension of education to all women, since women represent the majority of the world's illiterate;
3. Cooperation and solidarity for women victims of violations of their dignity, security or freedom, deprived of their rights or unable to defend themselves.

Concerning number 1 above, governments should adopt what is known as "affirmative action" to demonstrate its political will in the field of women's promotion. This policy can ensure the access of women to universities, employment as well as political and governmental posts. Recent statistics show that only 9% of women of the world are represented at parliamentary level and only 4% occupy decision making posts at the national level. Some governments and political parties have decided to fix quotas in

order to guarantee greater female participation in the political life of their countries. In France the Prime Minister decided last month to incorporate into the constitution the principle of parity between men and women in all fields. This is a real way in which governments can express their political will. Moreover it is a nonsense to think that any positive evolution concerning the status of women could be achieved without men's support. It is absolutely necessary to associate them to such an enterprise. Sensitisation and dialogue generally lead to success. Politicians must play the game with realism and sincerity – they cannot use women solely as voting tools – authority and power must be shared with those who represent often more than half of the electorate.

Furthermore, women who have successfully ascend to high posts of responsibility should not rest on their laurels and forget those others who are victims of so much discrimination. Women who are organised can play a very important role in the defence of women and human rights. In my country, the mobilisation and motivation of women's organisations and NGOs have widely contributed to the amelioration of women's image and consequently her status. This movement has its foundations in an event which had a heavy influence on the future of Moroccan women. In 1946, the late King Mohammed V asked his daughter to deliver an official speech with her face unveiled. At that period all women in Morocco wore veils. She did so, and the royal decision was a clear encouragement to all women to enter the political arena, considered at that time to be the preserve of men. By this action the monarch, in his capacity as head of state and Commander of the Faithful, showed that he considered Moroccan women as fully fledged citizens. The constitution adopted in 1992 stipulates in article 5 that "all Moroccans are equal before the law." Today we find women in all fields of national life: engineers, doctors, pilots, professors, diplomats, artists, gold medallists in sports, etc.

But it took a very long time to finally see women ascend to ministerial posts and to parliament. Progress is very slow in this field. Political parties have not yet shown their willingness to contribute to the promotion of women. Power is still very difficult to share. Besides, as indicated by a woman from my country: "Despite all the progress, she sails in ambiguity among several reefs such as poor knowledge of the law, anachronism in the law, in particular family law, male resistance, the paradox of female censorship, and most importantly, insufficient education especially in rural areas.

However it is said that “the Moroccan woman knows what she wants.” And what she wants is to put an end to all forms of discrimination and violence affecting her. She also wants to be able to occupy a legitimate place in male dominated careers and in political activities in order to contribute fully to the well-being and the prosperity of her country. Women all over the world have expressed the same will and purpose.

However, in order to reach their objectives women also should occupy strategic positions such as the ones offered in the information and communication industries and mass-media. Studies have shown that if public opinion is not influenced and the government not put under pressure, implementation of laws aimed at the elimination of all factors of discrimination will be slow.

I would like to conclude by saying that the time has come for women to face the future with determination. A future where there is no place for ignorance, prejudice, discrimination or segregation. A country which neglects half of its population will be condemned to extinction. Women have a vital role to play in the progress of their societies, in the strengthening of peace and security at the national and international level, in the promotion of human rights and in the protection of the environment. These are roles successfully assumed by women because they have such rich experience of handling their families prudently, in the role to which they had previously been confined.

It is true that life will not always be easy for those women who choose to assume responsibility of this kind. Discrimination, inequality, injustice and harassment of all kinds will not disappear overnight. However as the author George Mathew Adams has said: “ In this life we shall get only the things which we look for, for which we are ready to fight and sacrifice ourselves.”

¹ Ms. Halima E. Warzazi, Chairperson, United Nations Sub-committee on Human Rights, Working Group on Contemporary Forms of Slavery
Former Chairperson, United Nations General Assembly Third Committee
Former Chairperson, United Nations Sub-committee on Human Rights
Chairperson, World Conference on Human Rights Preparatory Committee
Former United Nations Special Rapporteur on Violence against Women

Asian Women's Fund

The Asian Women's Fund was established in July 1995 by prominent citizens concerned about the continued suffering of the victims of WW2 Japanese military sexual slavery, with the support of the Government of Japan. The primary aim of the Fund is to extend atonement and support to those who suffered as 'wartime comfort women'. The victims have suffered in silence for so long and are now of an advanced age, and it is therefore our sincere wish to act urgently, in accordance with their needs, to alleviate their pain in whatever small way we can. At the same time, recognising that prevailing attitudes of discrimination and violence against women are part of the background to the suffering inflicted on the 'comfort women,' the second pillar of the work of the Fund is to address contemporary violations of the dignity and rights of women.

Our activities include:

- hosting of international forums on contemporary issues on women;
- financial support to NGO projects addressing contemporary women's human rights issues
- research and analysis into the causes and prevention of violence against women, and other women's human rights issues, and;
- counselling for women victims of violence and other human rights violations

For further information, or a list of publications, please contact us at the address below, or visit our site on the world wide web.

Asian Women's Fund

Akasaka 2-17-42, Minato-ku, Tokyo, Japan 107-0052

Tel: (81) 3-3583-9322 Fax: (81) 3-3583-9321

e-mail: dignity@awf.or.jp

website: <http://www.awf.or.jp>